

## テレホンカード



年 組 ( )

「これは、何だろう？」

サトシは前から、その<sup>たても</sup>建物が気になっていた。

ガラスばりで、中には電話みたいなものがある。でも、だれも使っているところを見たことがない。

その日も、ぼんやりながめていると、<sup>きんじよ</sup>近所に<sup>す</sup>住むおじいさんが話しかけてきた。

「めずらしいのかい。そうだろうな。<sup>さいきん</sup>最近では、少なくなってきたからね。これは、電話ボックスだよ。」

「ここで、電話をするのですか？」

「そうだよ。<sup>あいて</sup>相手の家の<sup>ばんごう</sup>電話番号を回して、電話をかけるんだ。この町には、電話ボックスがなかったから、<sup>しやくしょ</sup>市役所にうったえ出て、長い長い年月をかけて、ようやく<sup>た</sup>建ててもらったんだ。おかげで、遠くの人とも話せるようになったんだ。」

「へえ——、すごいですね。」

「そうだ、テレホンカードをあげよう。このカードさえあれば、お金がなくても、電話をかけることができるんだ。ほら、君も<sup>ひつよう</sup>必要だろう？」

おじいさんは、サトシに<sup>はい</sup>灰色のカードを<sup>さ</sup>差し出して見せた。



——でも、サトシは人の電話<sup>ばんごう</sup>番号を1つも知らない。  
第一、家でも電話をかけたことがない。

おじいさんは、ほほえみながらカードをさしだしてくる。もらっても、かけられないのだから<sup>いみ</sup>意味がない。でも、<sup>う</sup>受け取らないのも、<sup>わる</sup>なんだか悪いし——。

サトシは、おじいさんにどう伝えるべきでしょうか。あなたの<sup>りゆう</sup>考えと理由を書きましょう。

.....
.....

話し合って考えたことを書きましょう。

.....
.....